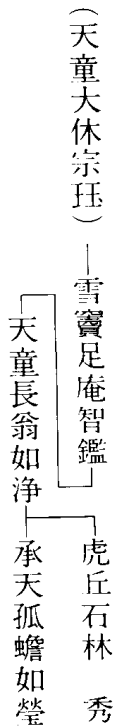


南宋末曹洞禪僧列伝(上)

はじめに

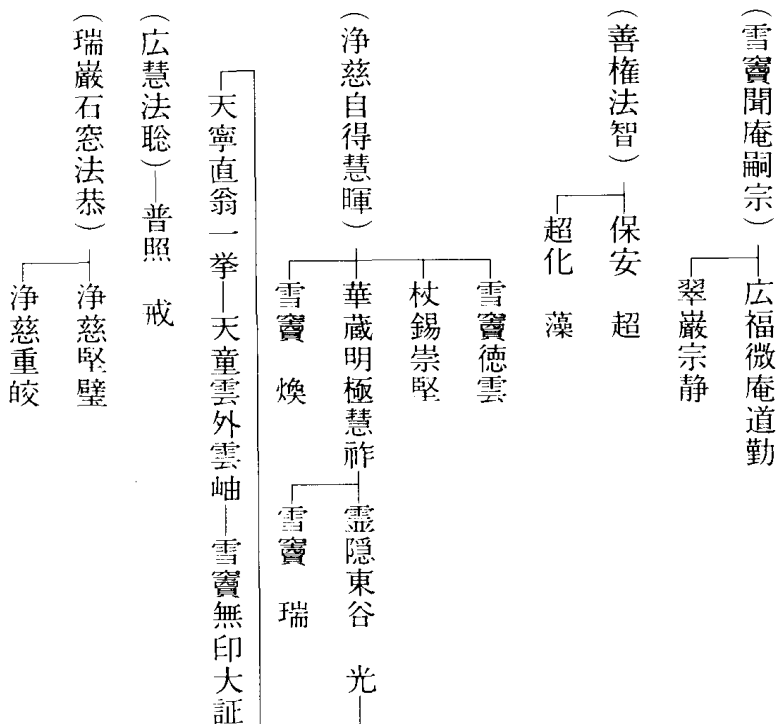
我が道元禪師の本師は、明州(浙江省)鄞県東の天童山景德禪寺に化導を敷いた長翁如浄(一六二二—一三三七)であり、如浄は系統的には中国曹洞宗の流れに属する禪者であった。如浄の頃には曹洞宗はすでにかなり衰微している時期であり、きわめて限られた人の名しか知られていない。もちろん、禪は師資相承を重んじる宗旨であり、曹洞宗とて何も如浄ひとりによって維持されてきたものではない。では、いったい如浄の前後、南宋から元代にかけて江南の地に活動した曹洞禪者には如何なる人々が存したのか。いま、そんな人々に関して、その埋もれた足跡をでき得るかぎり挙げてみることにしたい。(一)

〔真歇派〕



佐藤秀孝

〔宏智派〕



はじめに曹洞下一二世（洞山良价を一世とみる）以降で中国禅宗燈史に立伝されている人を、見録・無録を含めて整理してみると、右の系図のごとくわずかな人名が知られるにすぎない。ただし、（一）は曹洞下一一世の人である。

（一〇八八―一一五二）（二〇九一―一一五七）
およそ以上のごとく、わずかに真歇清了および宏智正覚の二系統の禪者が記されるのみである。たしかに『嘉泰普燈録』の編纂以降、しばらくの間、まとまった燈史・僧伝の編纂はなされておらず、南宋末期の臨濟宗松源派の雪蓬慧明による『五燈会元』二〇巻の編纂もそれまでの五燈をまとめたものにすぎない。燈史では明代の『続伝燈録』や『増集続伝燈録』以降のものでしか確かめられないものの、南宋末期になると、曹洞宗の勢力が急激に衰退している感は拭えないわけである。しかも、燈史上、後世に展開し得たのはわずかに真歇派の大休宗珙（一〇九一―一一六二）の系統と宏智派の自得慧暉（一〇九七―一一八三）の系統のみである。ここでは、とくに『嘉泰普燈録』編纂以後に活動した曹洞禪者の隠れた足跡を諸史料より窺ってみることにしたい。すなわち、『嘉泰普燈録』の時点ではいまだ名のみでその活動の足跡が定かでない人、あるいは『嘉泰普燈録』ではいまだ立伝されずに終わった人など、これまでその存在すら曖昧にされてきた人々より始めていきたい。（二）

慧照派について

ところで南宋末期の曹洞宗といえ、真歇派と宏智派の二系統のみのごとく見られやすいが、実際には、真歇清了や宏智正覚の系統のみでなく、その法兄に当たる慧照慶預（一〇七八―一一四〇）の系統すなわち慧照派も若干ながら南宋末まで福州（福建省）の地に余勢を残していたらしい。清了や正覚と同門に当たる慶預に関しては、今日、『湖北金石志』巻一一に「随州大洪山第六代住持慧照禪師塔銘」が存し、詳しい行実が知られる。（三）その活動は当時、清了や正覚にも勝るとも劣らないものであったらしい。法嗣もその住地であった随州（湖北省）の大洪山保寿禅院と福州の雪峰山崇聖禅寺の両所を中心に育成されているが、しばらく法統がつづくのは福州に展開した系統であった。（四）

一、孤峰惠深

すなわち明末清初の曹洞宗の重鎮であった永覚元賢（一五七八―一六五七）が編纂した『鼓山志』巻三「開士志」には、慶預の嗣法門人である孤峰惠深（一一八一―一二〇四）という人に関して、

第三十七代孤峰禪師、諱惠深。閩嶼赤嶼人、姓馮氏。年十四、依大乗仏心和尚剃落。参大洪預和尚得旨、克雪峰首座。後移主正席。未幾移能仁。紹熙癸丑九月、遷当山。（中略）己未四月、謝事。嘉泰甲子五月、普説罷揮偈辞衆。以筆一

拍而化。葬于三昧塔院。

とそのいくぶん詳しい伝記が記されている。⁽⁵⁾また明代編集の『雪峯志』巻五の「紀当山」によれば、やはり惠深に関して、

第二十七代惠深禅師、閩県馮氏子。淳熙十六年当山。次年示寂。寿八十七、臘五十九。

として、その詳しい年時が知られる。これらを整理して、いま惠深の行実をみてみよう。惠深は福州閩県赤嶼の人で、俗姓は馮氏とされる。ただ、『嘉泰普燈録』以降の禅宗燈史はその法諱を「慧深」と伝えているが、いまは『鼓山志』『雪峯志』とも「惠深」と記していることから、この方が相応しいであろう。孤峰とはその道号であろうが、これも『鼓山志』のみによって知られるものである。示寂年時と世寿にも問題があるが、仮に嘉泰五年に八七歳で亡くなったとするならば、その出生は北宋の重和元年であったことになろう。⁽¹⁸⁾

紹興元年に一四歳で福州閩県東山遂勝里に存した大乘愛同禅寺において臨済宗黄龍派の仏心本才に就いて剃落得度してあり、さらに大洪山の慶預に随つて旨を得、後に雪峰山の首座となったとされる。ただ、法臘が五九齡では受具が慶預の示寂して後となつてしまい問題になろう。また慶預との関わりからいえば、おそらく大洪山ではなく慶預が紹興四年に雪峰山に住持して以降に参じた比較的晩年の門人であったものとみられる。⁽⁶⁾ちなみに『嘉泰普燈録』巻一三「福州雪峰慧深

首座」の章では、惠深は単に雪峰山の首座としての肩書きで記されているから、編者の雷庵正受はその後の惠深の活動を明確には知らなかったものとみられる。

ちなみに『嘉泰普燈録』では、慶預の席下での首座惠深の示衆として、

示衆曰、未得入頭、応切切、入頭已得、須教徹。雖然得入本無無、莫守無無、無間歇。照乃曰、深兄説禅若此、惜福縁不勝耳。

という慶預との機縁を伝えている。これによれば、惠深は雪峰山の慶預の席下で首座として活動し、慶預に代つて普説をなすことも存したらしい。ただ、慶預はこのとき必ずしも惠深の立場を認めていなかったことがわかり、いまだ説禅の境界であつて福縁が具わっていないことを惜しんでいる。おそらく、その後も惠深は慶預の下で研鑽に励み、真にその法門を嗣続し得たことであろう。また、慶預の示寂後も多くの老宿に歴参していたものとみられる。

そして、惠深は後に雪峰山の住持の席に就任してあり、『雪峯志』はその時期を淳熙一六年のこととする。実に師の慶預が紹興一〇年六月に示寂してより四九年もの歳月が経過していることから、その間、惠深が如何なる活動をなしていたかは不明ということになろう。あるいは惠深は大刹の住持になることを好まず、韜晦隱遁的な生活を理想とする禅者で

あったのかも知れない。ただし、『雪峯志』が入寺の翌年に示寂したとするのは問題であり、おそらくは紹熙元年に雪峰山を退いた事跡を誤って示寂したかのごとくに推測したものである。

惠深は雪峰山につづいて温州（浙江省）北雁蕩山の能仁普濟禪寺に遷住しているらしいが、これは雪峰山を退住した年のこととみられる。そして、能仁寺に住すること四年にして、さらに紹熙四年九月に惠深は大慧派の海庵南瑩の後席を継いで福州閩東三〇里の鼓山湧泉禪寺の第三七代に陞住しているわけである。すでに惠深は七五歳を越えており、かなり老熟した境界の中にあつたものとみられる。鼓山に住すること七年にして、慶元五年四月に住職の事を謝したとされるから、惠深は高齢を理由に退閑して老いを養つたものとみられる。このとき帥府の葉翥（字は叔羽）はつぎの住持に大慧派の松堂祖鑿を請している。その後、終焉の計をなしていた惠深は、嘉泰四年五月に普説して後、遺偈を揮つて衆を辞し、筆で一拍して遷化したとされる。この点は、先の『嘉泰普燈録』の「福州雪峰慧深首座」の章に、

一日普説罷、揮_レ偈辞_レ衆、以_レ筆一拍手、竟不_レ収而化。

という惠深の最期の状況を伝えているのと相応している。『嘉泰普燈録』の表現は如何にも惠深が雪峰山の首座のままで亡くなったかのごとくに解されやすいが、これはおそらく

『嘉泰普燈録』の成立直前に惠深が示寂しているため、編者正受が惠深の諸山住持期の活動を省略し、最期の記事のみを記入したことに因むものとみられる。『鼓山志』によれば、惠深の全身は鼓山の三昧塔院に葬られたとされ、おそらくは『雪峯志』の伝えている世寿八七歳とする説は妥当であると思われる。

二、不群清越

この惠深には不群清越という法嗣が存したことが伝えられる。清越に関しては、従来、燈史類ではまったく名の知られない人であつたが、やはり元賢編『鼓山志』巻三「開士志」によれば、

第四十七代不羣禪師、諱清越。侯官陳古靈先生之裔。得_レ度于東禪融菴坦禪師。早歲遊方、歷_レ參名宿。晚來_レ此山、孤峰和尚命首_レ衆。繼居_レ西菴、四十余年、絶無_レ応縁意。淳祐庚戌、北山和尚遷_レ雪峰、次年府帥趙公、請主_レ本山、開法嗣_レ孤峯和尚。乙卯謝_レ事。庚申三月示寂。闍維_レ牙齒不_レ壞、塔_レ于黃坑積翠菴。

と清越の伝が載せられている。これによれば、不群清越は福州侯官県の出身で、北宋代の陳襄（字は述古、古靈先生）の裔孫とされる。陳襄といえは神宗の代に侍御史となり、青苗法の不便を論じ、王安石（字は介甫）や呂惠卿（字は吉甫）を貶斥して天下に謝せんことを請い、逆に王安石に忌まれて陳州（河南省）や杭州の知事となつた人である。その陳襄を祖先

に仰ぐ清越もまたそのまま進めば官吏の道を歩んだはずであろうが、何故か若くして選仏すなわち出家への道の方を選んだようである。

清越ははじめ閩県東南の東禅報恩光孝禅寺の融菴坦に随つて得度し、⁽¹³⁾早歳にして諸方に遊び、名宿に歴参したという。最後に鼓山に至って孤峰惠深に参じ、命ぜられて首座となつたとされるから、惠深にとっては晩年の門人であつたことにならう。ただし、その機縁の語句などはまったく知られない。惠深が示寂した直後からとみられるが、清越は鼓山の西菴に閑居すること実に四〇余年に及び、その間、絶えて世縁に応ずる意がなかつたとされる。もともと官僚社会から離れんとして出家の身となつた清越ならではのことかも知れない。この点は、師の惠深もまた同様に隠遁的な人であつたわけであり、おそらく両者とも華々しい活動を嫌う地味な性格であつたものとみられる。

しかし、淳祐一〇年⁽¹²⁵⁰⁾に至つて、臨済宗大慧派の北山宗信⁽¹²⁵²⁾が趙浄斎の招きで雪峰山に遷住するや、翌年に府帥趙公の請で清越は鼓山の第四七代に開堂出世し、このとき開法に当たつて惠深への嗣承香を焚いている。したがつて、この時点ではじめて曹洞下の嗣承を公に明らかにしたことになり、当時、すでに曹洞宗が地を払っていた感のあつた福州の地に法門を開示したわけである。その後、宝祐三年⁽¹²⁵⁵⁾に住職の事を謝して

退閑しているから、鼓山での接化はわずか六ヶ年にすぎなかつたことにならう。宝祐四年には趙平斎の請で楊岐派の無行⁽¹²⁶³⁾達真が清越の後席を継いでいる。⁽¹⁵⁾

その後、清越は景定元年三月に示寂しており、実に師の惠深の示寂後、五六年もの歳月が経過していることから、かなりの長寿を保つた人であつたとみられる。おそらくは八〇歳を越えていたはずであろう。その全身を闇維するや、牙齒は壊れなかつたとされ、墓塔が黄杭の積翠菴に建てられたと伝えられる。この点は、『鼓山志』巻二「建置志」の「支院」においても、

積翠塔菴、地名黄坑、在_二白雲洞下。宋住山嗣公・越公二塔、在_レ焉。今廢、云々。

とあり、同じく「建置志」の「祖塔」にも、

不群清越禅師塔、在_二黄坑積翠。

と記されており、清越の墓塔が第三四代の直菴元嗣⁽¹²⁸⁹⁾の墓塔とともに白雲洞の下、黄坑の積翠菴に存したことが知られる。元嗣は靈源惟清—仏心本才—大心謨—元嗣と次第する黄龍派の禅者である。⁽¹⁶⁾ただし、明末の元賢の当時にはすでにその積翠塔庵も廃絶していたらしい。

このように福州の地には慧照慶預の門流の曹洞禅者として、孤峰惠深と不群清越の師資が久しく鼓山や雪峰山を中心に余勢を残していたことが知られたのである。実に慶預の活

動以来、三代一〇〇年以上にわたって福州で慧照派の曹洞系が維持されたことになる。その具体的な接化のさまこそ伝えられないが、惠深・清越ともかなり隠遁的な禅風を振った人であつたらしい。ただ、こうした両者の性格は門人育成の面においてはあまり効果的ではなかつたはずであり、とりわけ清越の門人に関してはその存在も伝えられず、南宋末でこの派の法統も断絶しているものとみられる。

真歇派の門流

つぎに真歇派の系統についてみよう。真歇派は真歇清了の活動地にそれぞれに形成されたようであるが、後世に展開したのはわずかに大休宗珙から足庵智鑑と続いた一系のみである。この二人に関しては、南宋の文人である(一三七一—二二樓鑰(攻媿主人)の『攻媿集』巻一一〇に「天童大休禅師塔銘」と「雪竇足菴禅師塔銘」が存し、それぞれの詳細な行実が知られる。宗珙と智鑑の師資はほぼ明州慶元府の地を中心(一六二—二二七)に活動しており、この系統の禅を嗣続したのが天童如浄には(二二七—二四九)かならない。ちなみに虎丘派の無準師範に法を嗣いだ東福円爾が将来した『宗派図』においても、わずかに、

真歇了—大休珙—兄庵鑒—天童浄

とあり、宗珙以下の世代が補筆されるのみである。(19)もちろん、この系統は如浄の出世により一時期、南宋末禅林にかなり注

目すべき足跡を記したのであり、その如浄の下に道元禅師が輩出したことにより後に日本の地に大きく展開している。しかし、中国においては、如浄とその影響を受けた法嗣らの時代限りのものであつたらしく、元代にまで継承されることはなかつたようである。

では、智鑑の下には法嗣として如浄以外に名の知られる人はないのであろうか。『攻媿集』巻一一〇に載る「雪竇足菴禅師塔銘」によれば、

嗣法及受度三十余人。

と記されるから、智鑑は法嗣の門人と得度の小師を合わせて三〇余人が存したことが知られる。しかしながら、具体的にはそれらの門人の名を何ら伝えていない。智鑑の久しい接化期間からすれば、いまま少し名の伝えられる門人があつたとしても不思議ではないのである。如浄に関してはすでに別に「如浄禅師再考」などで論じているので、いまは再説しない。はじめに智鑑の門人である棘林杞、さらに如浄門下にしてその行実の一端が判明した人々について、考察を試みることにしたい。

一、棘林杞

ところで日本撰述になる『仏祖宗派図』や『正誤仏祖宗派図』巻一によれば、智鑑の法嗣として「仗錫棘林杞」という人の名が挙げられている。この棘林杞に関しては、大慧派の

(二二〇—二二六八)
物初大観の『物初贖語』卷二「祭」に、

仗錫棘林

十禅同盟、続々盃籜。公每_レ来会、咲言惜惜。別未_レ幾時、云_レ疾弗_レ起。吾不_レ謂然、遺墨滿_レ紙。大寂寂門、電転風急。道本如_レ斯、又奚挹々。洞上厥緒、不_レ絶如_レ綫。長庚嗣_レ輝、燁々絢爛。縁稔_レ四明、坐席婁遷。斗水方_レ池、局横海鱸。我旧訪_レ公、躡_レ雲重重。整_レ殿穹_レ堂、猶湿_レ青紅。日俟峻歩、凌高陟遐。今也不_レ然、孰大_レ其家。寥寥象季、吾道孔艱。公平不_レ留、慨_レ其永嘆_レ。

という、その示寂を悼む祭文が伝えられている。この中で大観は「洞上の厥緒、絶えざること綫の如し」という表現を用いていることから、棘林杞が曹洞の法脈を受けていることは(21) 確実である。ただ、つぎの「長庚、輝きを嗣ぎ、燁々として絢爛たり」とある「長庚」を如何に解するべきか。長庚とは金星すなわち太白星をいう。太白は天童山を意味するから、棘林杞は天童山に住した曹洞禅者に嗣承していることになるうか。しかも、天童山に住した曹洞禅者としては、一六世宏智正覚・一七世大洪法為・一八世大休宗珪が知られるが、彼らの法嗣とみるには世代的に無理があり、また棘林杞が真歇派であることも動かないとすれば、長庚とは太白の長翁すなわち天童三一世の如浄を指することになる(22)。

では、棘林杞がさらに智鑑の法嗣であることが動かないと

するならば、この天童山の如浄との関わりを如何に解するべきか。如浄自身がすでに智鑑の晩年における門人であったわけであるが、棘林杞はさらに智鑑の最晩年の門人であったのではなからうか。(23) 若くして智鑑に参じたが、その示寂後は法兄の如浄を慕って随侍したとも解されよう。このため、棘林杞が智鑑の法嗣とも如浄の法嗣とも見られたものではなからうか。

さらに「縁は四明に稔り、坐席、婁しば遷る」とあるから、棘林杞はかつて足庵と号した智鑑と同じように、ほぼ四明(明州)の地を活動の拠点としていたらしく、しばしば州内の諸刹の住持を遷ったようである。(24) 棘林杞がどれほどの禅刹の住持になったのかは定かでないが、この地には名刹が多く、また当時の曹洞宗の一大中心地であった点をも考え合わせれば、そうした化縁の上に棘林杞の活動も存したわけであろう。

(二一八五—二二六九)
ところで棘林杞は松源派の虚堂智愚と深い交友をなした人であることが、智愚の語録である『虚堂和尚語録』によって知られる。両者の親しい道交が何れの時点から始まっているのは定かでないものの、あるいは智愚も語録に付される法嗣の閑極法雲の撰した「行状」によれば、かつて浄慈寺再住時代の如浄に参学した経験が存することから、すでにこうした如浄下での交流に始まるものかもしれない。(25)

(二四一) 淳祐元年の夏に智愚は定海県(後の鎮海県)東南九〇里の

青松峰(芝峰)の瑞巖開善禪寺の住持職を退いて、幽邃なる溪谷の美に恵まれた同じ定海県東南七〇里にある啓霞山(霞谷)崇梵院に閑居しているが、ときに啓霞山の住職であったのが棘林杞であったとされる。この時期に智愚が啓霞山に隠閑している理由は、自らの「頌古」と「代別」の編成にあつたらしいが、この間、およそ三年間にわたつて智愚は棘林杞の席下に身を寄せているわけである。この点は、後に智愚自身「虚堂和尚語録」卷三「慶元府阿育王山広利禪寺語録」において、

仗錫和尚至上堂。挙_レ盤山似_レ地擎_レ山之孤峻、如_レ石含_レ玉不_レ知_レ玉之無_レ瑕、若能如_レ是、是真出家_上。師云、盤山其実只要_レ出家兒方法不_レ相到。山僧昔寄_レ霞谷、与_レ棘林老子_レ也如_レ是。別去一十余年、今日相見亦如_レ是。且道、其中意作_レ麼生。卓_レ主丈。如是如是而已矣。

と述べていることによつて知られる。智愚が鄞県東の阿育王山広利禪寺に陞住するのは宝祐四年四月のことであり、この上堂は夏安居の期間になされたものであるから、解制以前に棘林杞が智愚を訪ねているわけであるが、智愚が啓霞山を去つたのはそれより一〇余年前ということになる。したがつて、智愚は淳祐元年夏より数ケ年、すなわち具体的には淳祐四年まで啓霞山に留まっていたものと推定される。(29)

その後、智愚と棘林杞との交流はしばらく存しなかつたらしいが、すでにみたごとく宝祐四年に智愚が阿育王山に陞住すると、棘林杞の方から親しく智愚を訪ね、再び智愚との道交を温めている。棘林杞はこの頃には慶元府鄞県西南一二〇里の仗錫山延勝禪院に住しており、きわめて老熟した境涯にあつたらしい。すでに師の智鑑が示寂した紹熙三年より六四年、法兄の如浄が示寂した宝慶三年より二九年もの歳月が経過している。おそらく棘林杞はすでに九〇歳前後の年齢には達していたものと推測される。智愚にとつても円熟した老衲である棘林杞との交友はきわめて意義深いものが存したはずであろう。

事実、『虚堂和尚語録』にはほかにも棘林杞との交流を伝える数種の偈頌が伝えられている。すなわち、卷六「仏事」には、

棘林請為_二沙弥_一付_レ衣

做_レ処_レ纈密、且非_レ割載而成。転_レ手付来、暗合_二宝鏡三昧_一。二子頂受、是真克家。

が収められており、これは棘林杞が二人の沙弥のために衣を付した際のものである。ここでも智愚は「做_レ処_レは纈密なり」とか「暗に宝鏡三昧に合す」と述べているから、曹洞の宗旨を意識した表現をなしている。しかも、この二沙弥は真の克家として共に期待された人物であつたらしい。同様に巻七

「偈頌」にも、

棘林

海鳳飛来不_レ敢棲、旧條新刺利如_レ錐。茫茫出得出不_レ得、只許拚_レ身到者知。

が載せられており、ここでも棘林杞が老熟してもなお怠らずに学人接化に努める境涯を称えて余すところがない。さらに卷一〇「虚堂和尚新添」には、

棘林和尚遺書至

因記七峰来_レ玉几、去年花月下_レ雲坳。未_レ周一歳背盟我、剔_レ尽春燈眼不_レ交。

という偈頌が存し、棘林杞が自らの示寂に臨んで阿育王山の智愚に遺書を呈していることが知られる。花月は二月を意味するから、棘林杞は七峰(四明山の連峰)の仗錫山より玉几(阿育王山)に来たって智愚に見えた宝祐四年の夏安居より翌年の二月まで智愚の下に留まっていたものとみられ、その後、阿育王山を去って一ケ年を経ずして初春に示寂したとするならば、その示寂は宝祐六年初春ということになる。智愚と曹洞禅者との道交は、その参学期以来なされているが、この棘林杞との関係において、その極に達している感があり、「我れに背盟す」の言に智愚のこの人に寄せる並々ならぬ心情を知ることができる。

そして、また先のごとく大慈山に在った大観も、棘林杞の

祭文を撰したわけであり、棘林杞は大観とも深い関わりが存したものと思われる。当時、智愚と大観もかなり親しい関係にあること(31)から、棘林杞を含めて同じ東浙出身者による道交が存していたものと見られる。ただ、祭文の中で大観は、棘林杞が法門を嗣続する門人に恵まれなかったことを嘆いているから、この人の系統はその後に続かなかったものとみてよからう。

示寂の時点で棘林杞が何歳であったのかは定かでないが、智鑑との関わりなどからいっても、世寿はすでに九〇歳をかなり出ていた計算になり、法兄の如浄よりははるかに長命であったことが知られる。この棘林杞の埋もれた活動は、真歇派の動向を知る上でも注目すべものがある。

ところで如浄およびその嗣法・参学門人に関しては、すでに「如浄禅師再考」「如浄禅師示寂の周辺」および「如浄会下の人々―嗣法・参学門人の追補―」などにおいて考察しており、とくに道元禅師やその門下とも親しい無外義遠(六六)に関しては「無外義遠の活動とその禅風」に詳しい考証をなしておいた。(32)ここでは、その際あまり詳しく考証しなかった雪屋正詔のことや、その後の成果を踏まえて、新たにその足跡の一部が判明した人々に関してのみ述べることにしたい。

二、孤蟾如瑩

如浄門下の筆頭の法嗣とみられるのは孤蟾如瑩である。如瑩に関しては、あるいは『如浄和尚語録』『明州瑞巖語録』に「侍者如玉編」とある如玉というのが、いま言う如瑩に相当するのかもしれない。名のみで無録ではあるが、如瑩を載せる燈史としては、『増集続伝燈録』『禅燈世譜』『繼燈録』『祖燈大統』『五燈全書』などがあり、また道元禅師に仮託される「如浄禅師続語録跋」や『仏祖宗派図』など日本撰述史料にも一様にその名が見い出せるから、臨済宗の勢力が圧倒的に強かった南末末の江南禅林にあつて、如瑩は如浄の高弟として多大の接化を振っていたものとみてよく、かなりの力量を持つ人であつたと思われる⁽³³⁾。

『増集続伝燈録』『祖燈大統』および日本撰述史料は、その住地を明確に「承天」と記しているが、これは甲刹の一つで蘇州（江蘇省）呉県西北に存した承天能仁禅寺のことである⁽³⁴⁾。その活動の一端として、『増集続伝燈録』巻四「松江澱山蒙山德異禅師」の章に、

参蘇之承天孤蟾瑩。蟾問、亡僧遷化向甚処去。師罔措。悱
発参究。因首座入堂墜香合作声、豁然有省。乃成頌曰、
没興路頭窮、踏翻波是水、超羣老趙州、面目乃如此。

とあり、同様の記事は明の雲棲株宏の編になる『禅関策進』
「諸祖法語節要」の「蒙山異禅師示衆」にも、

至承天孤蟾和尚之处。帰堂。（中略）三月初六日、坐中正拳。無

南末末曹洞禅僧列伝（佐藤）

字。首座入堂焼香、打香盒作声、忽然因地一声、識得自己。捉敗趙州。

として載せられている。これは後に臨済宗楊岐派の開福道寧の系統の皖山正凝（止凝とも）に法を嗣いだ蒙山德異が、その参学のはじめに承天寺の如瑩に学んだことを伝えるものである⁽³⁵⁾。とくに注目すべきは、如瑩が「亡僧遷化して甚処に去る」と諮問していることであり、また德異が如瑩の下で「趙州無字」の古則公案を参究していることであろう。如瑩もまた如浄と同じように「趙州無字」をもって学人接化の一助としていたものと推測され、南末末期の曹洞宗の変貌の実態を知る上でも貴重な内容といつてよい。

德異は承天寺の如瑩の席下を去つた後、杭州余杭県の径山興聖万寿禅寺に松源派の虚堂智愚を、杭州钱塘県の北山景德靈隠禅寺に無準下の退耕德寧を、钱塘県の南屏山浄慈報恩光孝禅寺に智愚の法弟の石帆惟衍をそれぞれ訪うているから、如瑩が如浄の示寂して四〇年近い咸淳元年頃においても活動していたらしいことが知られ、かなりの長寿を保つた人であろうと察せられる⁽³⁷⁾。

ちなみに『虚堂和尚語録』巻八「臨安府浄慈報恩光孝禅寺後録」によれば、智愚が景定五年に浄慈寺に入寺して間もなく「謝新承天和尚上堂」にて、新たに法弟の石帆惟衍が姑蘇の承天寺の住職となつたことを伝えていることから、ほぼ

同時期に承天寺に在った如瑩が惟衍の前住か後住であった可能性が強いことになる。如瑩が退院か示寂に臨んで自らの後席を惟衍に譲っているか、逆に惟衍の後席を継いで承天寺に陞住しているとも解されよう。惟衍はその後、智愚が咸淳元年に径山に遷るのに際して、浄慈寺の後席を継いでおり、この人もかつてその参学期に智愚とともに如浄に学んだ経験があるらしい。⁽³⁹⁾ 智愚や惟衍は若くより如瑩と親しかったものと推測される。

三、石林秀

また石林秀も『増集続伝燈録』、『禅燈世譜』、『継燈録』、『祖燈大統』、『五燈全書』などの中国燈史に如瑩とともにその名が載せられている人である。しかし、「如浄禅師統語録跋」や『仏祖宗派図』にはその名が見られず、『正誤仏祖正伝宗派図』巻一に至って、ようやく名のみが挙げられている。⁽⁴⁰⁾ 石林が道号であり、法諱の上字が何であったのかは定かでない。おそらく道元禅師とも面識はなく、跋の撰者もその存在を知らなかったであろう。一般の燈史ではその住地を記さないが、わずかに『祖燈大統』の「目錄」のみに「虎丘石林秀」とあるから、十刹九位である蘇州呉県西北七里の虎丘山雲巖禅寺に住したことが判明する。⁽⁴¹⁾ ただ、虎丘山の寺格からして、それ以前にも甲刹その他の寺院の住持を歴任してきたことであらう。

ちなみに『虚堂和尚語録』巻一〇「秉炬」には、

東山秀老請_レ為_レ小師一侍者

一呼便領、終不_レ孤他国師、再喚不_レ回、祇為_レ貧程太速… 春雲乍歛、宿雨初収。火焰裏轉得身来、鉢袋子付囑有_レ在。

という偈頌が存し、さらに同じく、

祖秀老宿

得_レ之豈在_レ衣盂、賽過南能北秀、胸襟空洞無_レ物、導_レ人如_レ出_レ諸_レ己。正如_レ邪活如_レ死、一箇無_レ羈葛苴翁、莫教触著無明起。

という偈頌も存している。はじめの偈頌は東山の秀老がその小師の一侍者の遷化に際して智愚に請じたものであり、つぎの偈頌は祖秀老宿のためになした秉炬であり、この秀老と祖秀は同一人物と見られる。ここにいう東山をいま虎丘山の別称とみるならば、祖秀とは石林秀のことを指しているとも解せられる。智愚と石林秀はかなり親しい交流をなしていたことになり、また祖秀を石林秀とみるならば、その法諱が判明することになる。⁽⁴²⁾

四、損翁

この人に関しては、道号のみで法諱が定かでない。その存在を伝えるのは『物初贍語』巻二一の「祭」であり、そこには「仗錫棘林」につづいて、

智門損翁

洞上厥緒、晚惟長庚。孰承其後、孰扶其綱。翁於斯時、矯如鸞翔。江湖顛待、于前有光。真率自任、有余慈祥。白巖叢林、新豊旧腔。孤唱易悅、喧々四方。凄其一夕、調転無生。豈不念此、宗乘包桑。孰能特起、堅最勝幢。昔忝交承、今薦一香。我心孔悲、不悲其亡。

という損翁に対する祭文が存している。棘林杷の場合と同じように、「洞上の厥緒、晩に惟だ長庚のみ」とか「白巖の叢林、新豊の旧腔」という表現があるから、曹洞の法脈を受け、やはり如浄の法嗣か法弟に当たったことは疑いなく。従来、その存在はまったく知られなかっただけに、注目される人であろう。物初大観がその示寂を悼む祭文を撰していることから、親密な道交が存していたのかも知れない。⁽⁴³⁾

ちなみに『癡絶和尚語録』巻下「径山癡絶和尚普説」には、

金山損翁和尚請ニ山野。以累年之滂、一衆艱食、不レ免ニ下山持鉢。因得到ニ紫金峰頂ニ瞻望。堂頭損翁和尚、仰荷不レ鄙、令ニ為レ衆東語西話。(下略)

が存し、また『石溪和尚語録』巻下「偈頌」にも、

損翁

明知為レ学日有レ益、不レ知為レ道又如何。但覺家貧身漸老、聰明不レ及旧時多。

という偈頌が見い出せる。これを同一人とするならば、損翁はこのとき鎮江府（江蘇省）の金山龍游禪寺の住持であった

南宋末曹洞禪僧列伝上（佐藤）

ことになり、⁽⁴⁴⁾建康府（南京）の蔣山（紫金峰）太平興国禪寺の住持であった虎丘派の癡絶道冲を招いて普説を請うたことがわかる。⁽⁴⁵⁾また同様に松源派の石溪心月とも交友をなしていたことになる。ただし、道冲や心月の語録からは、損翁が曹洞下の人であるか否かは明瞭でない。

また損翁がその晩年に住していた「智門」とは、明州象山県西二五里の白巖山智門禪寺のことを指しているものと見られる。⁽⁴⁶⁾ただし、金山が甲刹であるのに対して、智門寺は何ら官刹ではないことから、おそらく損翁は晩年にこの寺に退閑住持していたのではなからうか。^(三三五―三三八)

ところで、後日本にて夢窓派の義堂周信によってまとめられた『新撰貞和集』巻上「祖塔」に、

浄和尚塔（在天童） 損翁（宋人）

杜鵑啼血緑陰交、三遶蘿龕恨ニ転請。紫殿宸台絶ニ車跡、月明金鳳宿ニ龍巢。

という偈頌が存している。これは宋人の損翁という人が、天童山の如浄の墓塔を礼した際になしたものであるが、宋人にして如浄の墓塔を礼するのは、如浄が示寂してより南宋が滅びるまでの半世紀ほどに限られるから、ここにいる損翁は如浄との関わりがかなり親密な人であったと見なければならぬ。これを詠じた損翁の「損」を仮に「損」の誤記と見るならば、いまいう損翁のことを指すと見れないであろうか。さ

すれば、損翁を如浄の法嗣とする説をさらに裏付けることにならう。この偈は明らかに如浄の禅を踏まえるものであり、如浄の人となりを継承したと見られる損翁にして、はじめに示し得るものといえるだろう。⁽⁴⁷⁾

五、無沢徳霑

いま、ひとり如浄の門人とみられる人として新たに無沢徳霑の存在が知られる。すでに『如浄和尚語録』の「讚仏祖」を編した人として徳霑という名の侍者がいたことは知られて⁽⁴⁸⁾いるが、如浄の仏祖賛も他の禅者の場合と同様に住山期でも比較的に初期にまとめられたものであろうから、これを編している徳霑もまたはやくに如浄の門に投じた門人であったとみられる。

従来、この徳霑に関しては、如浄に学んだという事実のほかは、その足跡などがまったく不明であったわけであるが、『無文印』卷三「記」には、つぎの⁽⁴⁹⁾とき文がみられる。いま、同じ道璨の『柳塘外集』卷二「記」のものを校訂して示してみよう。

疎山砌路記

北塔去^レ寺五里、而門臨^ニ通衢。北抵^ニ郡治、南至^ニ金溪。傍趨^ニ建邑、率皆由^レ是。崇岡蜿蜒、中斷復起。白石齒^ニ齒、与^レ足為^レ仇、行者病^レ之、三百祀矣。徳霑住山之四年、衆倍^ニ異時、而庶績咸理。寺僧宗璉、斲^ニ石他山、躬率^ニ力役、風雨不^レ廢、逾^レ年

竣^レ事。其直矢如、其平砥如也。由^ニ通衢^ニ至^ニ塔所、支徑縈迴、遠殺^ニ通衢^ニ之二。祖^レ了謀^ニ諸者宿、用竟^ニ厥役、穹者夷、隘者闢。露裾不^レ濡、雨履不^レ塗、信^レ步意行、足不^レ扱^レ地。睨而視^レ之、盤旋如^ニ垂虹^ニ下飲^レ也、跛而望^レ之、天矯如^ニ蟠龍^ニ上翔^レ也。昔持地菩薩、平^レ地待^レ仏。仏告以^レ当^ニ平^ニ心地、則^ニ世界地^ニ一切皆平^レ。由^レ是悟入、二僧之勤、可^レ謂至矣。無扱老子、不^レ応^ニ久默^ニ斯要^レ也。不^レ然、石豈得^レ無^レ言乎。

趨^ニ趨^ニ。率^ニナシ。齒齒^ニ巉巉。異時^ニ多。宗^ニ崇。斲^ニ斫。事^ニ工。平砥^ニ砥平。塔^ニ埵。支^ニ岐。迴^ニ迴。二^ニ上^ニ二。祖了^ニ僧。宿^ニ旧。履^ニ履。虹^ニ虹之。蟠龍^ニ盤龍之。則^ニ心地平則。扱^ニ文。

とあり、疎山に在った徳霑という住職の名を伝えており、時代が一致し、法諱も特異なことから、如浄に参学した徳霑と同一人物と見てよからう。「無扱老子」とあるから、徳霑は道号を無扱と称していたことがわかる。その住した疎山とは撫州(江西省)金谿県西北五〇里の疎山白雲禅寺のことであり、唐末に洞山下の疎山匡仁によって開創された名刹である。南宋末より元代には甲刹⁽⁵⁰⁾に列しており、撫州においてはかなりの大刹であったらしい。「疎山砌路記」は北塔より疎山に至る路を寺僧の宗璉や祖了らが中心となつて切り開いたことを記したものであり、わずか入寺四年ながら住持徳霑のすぐれた統率力が知られ、会下の大衆はそれまでに倍したとされるわけである。

徳霑に関しては、同じく『無文印』巻一九「書筭」にも、

霑無扱

別去五六年、侍教不旬日。寒雲漠漠、黯然皆別色也。彼上人者、嘗以倚闌握手之語、丁寧告戒之。已無它辭。更望善遇之為佳。馬之千里者、必掉鞅脫轡。養之以歲月、自当有三天間十二氣象。垂首帖耳於卓櫪之下。惟芻粟是謀者、王良造父之所不取也。和尚高明、乃可語此。扁舟西向、尚当款叙。

という書簡が伝えられている。「別れ去りて五六年」とあるから、道璨と徳霑はそれまでに面識があり、しかもかなり親しい道交をなしていたものらしい。

ちなみに『無文印』巻五「墓誌塔銘」の「天池雪屋詔禪師塔銘」によれば、正詔は天童山の如浄に参じて心印を得て後、諸老の門に投じてその所得を証明され、のち江南に帰って列岫（所在地は未詳）にて侍香を勤め、さらに疎山に記室を掌つたとされる。⁽⁵¹⁾正詔が廬山の天池禪寺に開堂出世するのは淳祐元年頃であるから、それ以前に廬山に近い撫州の疎山に到つたのであれば、時の住持が徳霑であった可能性が強い。同門であることから、徳霑が法弟の正詔を招いたとも解されよう。

さらに徳霑については『無文印』のみでなく、やはり大慧派の物初大観の『物初贖語』巻一五「跋」にも、

南宋末曹洞禪僧列伝(佐藤)

靈源大士讚芙蓉真蹟

芙蓉孤風峻節、秋霜烈日、任明安垂絶之寄、遂得丹霞鹿門、繼繼承承、熾焰莫遏。虎丘霑無扱、出示靈源讀序述洞上中興命脉所繫處。墨猶新湿、紙缺弗完、既失復得、仰止先哲標度。嶄然雪後諸峯、玉立天表。

という跋文が存し、その中に虎丘の霑無扱の名が見い出せる。これによるなら、徳霑は蘇州呉県北の虎丘山雲巖禪寺にも住職していることになり、明確に曹洞禪者であったこととともに、道璨のみでなく大観とも密接な道交をなしていたことが判明する。雲源大士というのが誰であるのかは定かでないが、その所持していた芙蓉道楷の墨蹟に対して、大観に跋文を請うているわけである。ちなみに大観は丹霞子淳の系統⁽⁵²⁾とは別に、鹿門自覚の流れがかなり河北の地に展開していることを知っていたらしい。それはともあれ、徳霑が曹洞下の法流を嗣いでいたこと、そしてその嗣法の師が如浄であることは疑いなく、おそらく甲刹位の疎山に次いで十刹位の虎丘山にまで陞住していることになり、同門の石林秀とともに重要な立場にあったことが改めて窺われる。

このように如浄に参学した徳霑は、禅宗史上に隠れた如浄の法嗣であったと見てよいであろう。この点、江西地方に活動した正詔が同じく中国禅宗燈史や日本撰述の宗派図などに記されなかったことを考慮するなら、徳霑の名が知られな

つたとしても何ら不思議ではなからう。

六、雪屋正詔

(二二〇一—二二六〇)
雪屋正詔は江西の廬山に活動した如浄下の曹洞禪者であるが、その名は各種の禪宗燈史や高僧伝などにはまったく見出しされない。ところが幸いに臨濟宗大慧派の無文道璨の詩文集である『無文印』巻五「墓誌塔銘」および『柳塘外集』巻四「塏銘」に「天池雪屋詔禪師塔銘」が載せられていることにより、今日、珍しくもその行実の全貌が知られる人である。この塔銘は正詔の示寂後もない時期に、門人の若鳳が師正詔の行実を書して、廬山開先禪寺に在った道璨に銘文を依頼し、これを受けて道璨が撰したものである。いま、この塔銘の全文とその書き下し文を示し、これを分析することにしよう。なお、便宜上、より善本である『無文印』の文を定本とし、これに『柳塘外集』の文を校訂して示すことにしたい。

天池雪屋詔禪師塔銘

曹洞諸老、以真履実践、与道為配、溢為語言。葩華流麗、如透花春色。真積力久、機動籟鳴、有不自知。所以然者、雨洗淡紅桃萼嫩、風搖淺碧柳絲輕。眼正句活、汽伝洞宗正印、甚矣。未易以語言觀也。

嘉定間、浄禪師、倡足庵之道于天童、懼洞宗玄学或為語言、勝、以惡拳痛棒、陶治学者。肆口縦談、擺落枝葉、無華

滋旨味、如蒼松架、擊風雨盤空。曹洞正宗、為之一變。天池雪屋禪師、時在侍旁、親証是三昧。已而横點頭曰、吾宗不如此是、吾祖不如此是也。吾其紹述宗祖乎。宴坐天池、十有八年、仰觀俯察謂、道滿天地間、陽舒陰慘、秋明春媚、皆道之所存。点染融化、活弄死語、精神百倍、而俗眼少有識之者。

師諱正詔、番之于越人。父謝、母柴。少從雕峯法慈、受僧業。祝髮。遊吳越、受心学於天童。歷登諸老門、以印其所得。親老還江南、復侍香列岫、掌記疎山。声名獵獵不可掩。文昌趙公必愿、以天池請出世。山高雲深、衆不及百、而職分甚脩。居七年寺燬。師不亟不徐、尋復旧貫。疏通玲瓏、悉出心画口授、無或不強人意。築菴山阿、鑿池引泉、環以幽花細竹、夷猶其間、以遂所樂。端明厲公文翁、為扁曰明月。景定元年四月庚子示寂。寿五十九、臘四十。度弟子若干。其從、奉師靈骨舍利及火後齒牙頂骨不壞者、塔于明月菴後。

若鳳、狀師行請余銘。余行天下幾三十年、多交当世名尊宿、猶欠識師。東游海上、嘗閱師兔園集、誦其語想見其人。自京還番、數交訊。番去廬山不遠、欲見莫能。来開先、可以一見、而師滅矣。

師蕭閑凝遠、有晋唐人風味。工歌詩、託物寄興、陶写其胸中至樂、意在言外。觀者不具眼、乃以諸家目之。是見師杜德機也。道喪千載、託於語言。粉粉末流、能以語言發揮道妙者、不多見。僅僅有之而世之識真者、又絶少。淡紅淺碧、眼固正矣、句固活矣。使居今之世、不目為

詩家也幾希。此余所以為師太息也。銘曰、

洞学玄旨、日行太空。大千丹霞、盛于芙蓉。

大休足菴、扶持正統。以地擎山、如石涵玉。

天童長翁、初無寸長。無寸長處、万丈耿光。

雪屋空寒、春行万里。点染華風、散在百卉。

大癡小點、華于一門。我行荒草、汝入深村。

所同者道、不同者迹。捉象捉兔、各全其力。

謂師滅度、指北為南。精神照人、明月一菴。

塔—塙。華—燐。透花—花透。知—知其。倡足庵—唱足菴。于

—於。華—花。架—駕。旁—傍。于—干。雕峯—雄峰。受僧業

—ナシ。学—要。愿—願。脩—修。貫—觀。齒牙頂骨—頂骨牙

齒。塔于—塙於。余—予。余—予。幾—凡。当世—天下。猶—

獨。游—遊。閑—間。諸—詩。德—清。余—予之。于—於。于

—於。菴—庵。丈—象。華風—風華。華于—萃於。荒—芳。村

—林。謂—為。菴—庵。

およそ原文は以上のようなのであるが、つぎにその書き下し文を示してみたい。

天池の雪屋詔禪師の塔銘

曹洞の諸老は、真履実践を以て、道を配いを為し、溢れて語言を為す。葩華流麗にして、花を透る春色の如し。真に力を積むこと久しく、機動いて籟のごとく鳴るも、自ら然る所以を知らざる者有り。雨は淡紅を洗いて桃萼嫩く、風は浅碧を揺らして柳絲輕し。眼正しく句活して、沘んど洞宗の正印を伝う、甚しきかな。未だ語言を以て観ること易からず。

嘉定の間、淨禪師、足庵の道を天童に倡え、洞宗の玄学の或いは語言の爲めに勝れたるを懼れ、惡拳痛棒を以て學者を陶冶す。口を肆にし談を縦にして、枝葉を擺落して、華滋の旨味無く、蒼松の壑に架し風雨の空を盤るが如し。曹洞の正宗、之れが爲めに一変す。

雪屋禪師、時に在りて旁に侍し、親しく是の三昧を証す。已にして横點頭して曰く、「吾が宗、是の如くならず、吾が祖、是の如くならず。吾れ其れ宗祖を紹述せん」と。天池に宴坐すること十有八年。仰觀俯察して謂く、「道は天地の間に満ち、陽には舒び陰には惨い、秋には明かに春には媚しむ、皆な道の存する所なり」と。点染は融化して、死語を活弄し、精神百倍にして、俗眼にては之れを識る者有ること少なし。

師、諱は正詔、番の干越の人なり。父は謝、母は柴。少くして雕峯の法慈に従い、僧業を受けて祝髮す。吳越に遊び、心学を天童に受く。諸老の門に歴登し、以て其の所得を印せらる。親老いて江南に還り、復た列岫に侍香となり、記を疎山に掌る。声名は獵獵として掩う可からず。文昌の趙公必愿、天池を以て謂うて出世せしむ。山高く雲深くして、衆は百に及ばず、職分、甚だ脩まる。居ること七年にして寺燬く。師、亟やかならず徐ろならず、尋で旧貫に復す。疏通玲瓏にして、悉く心画・口授に出だし、人意を強いざる或ること無し。菴を山阿に築き、池を鑿り泉を引き、環らすに幽花細竹を以てし、其の間に夷猶して、以て楽しむ所を遂ぐ。端明の厲公文翁、爲めに扁して明月と曰う。景定元年四月庚子に示寂す。寿五十九、臘四十。弟子を度すること若干なり。其の従、師の靈骨・舍利及び

火後の歯牙頂骨の壞せざる者を奉じて、明月菴の後に塔す。

若鳳、師の行いを状して余に銘を謂う。余、天下に行くこと幾んど三十年、多く当世の名尊宿に交わるも、猶お師を識ることを欠く。東のかた海上に遊びて、嘗て師の兔園集を閲し、其の語を誦し其の人を想い見る。京より番に還り、数しば交訊す。番は廬山を去ること遠からざるも、見えんと欲して能すること莫し。開先に來たりて以て一見可くも、師は滅せり。

師、蕭閑凝遠にして、晋唐人の風味有り。歌詩に工にして、物に託して興を寄せ、其の胸中の至樂を陶与して、意は言外に在り。観る者、眼を具せざれば、乃ち諸家を以て之れを目けん。是れ師を杜徳の機と見るなり。道は千載に喪い、語言に託す。紛紛たる末流、能く語言を以て道妙を發揮する者、多くは見ず。僅僅に之れ有るも、世の真を識る者、又た絶えて少なし。淡紅と浅碧、眼は固より正しく、句は固より活す。今の世に居らしめば、目して詩家と為さざること、也た幾んど希ならん。此れ余が師の爲めに太息する所以なり。銘に曰く、

洞学の玄旨、日に太空に行く。

丹霞に大いに、芙蓉に盛んなり。

大休・足菴、正統を扶持す。

地の山を撃ぐるに似て、石の玉を涵るが如し。

天童の長翁、初めより寸長無し。

寸長無き処、万丈の耿光。

雪屋は空しく寒く、春は万里に行く。

華風を点染し、百卉に散在す。

大癡小點、一門を華る。

我れは荒草に行き、汝は深村に入る。

同ずる所の者は道にして、同ぜざる者は迹なり。

象を捉え兔を捉うるに、各おの其の力を全うす。

師は滅度せりと謂わば、北を指して南と為すなり。

精神、人を照らす、明月一菴。

いま、この塔銘によって正詔の行実を簡略に窺ってみることにしよう。正詔というのは法諱であり、道号を雪屋と称している。「番の干越の人」とされるから、番州すなわち饒州(江西省)潘陽餘干県東南の干越亭(干越亭とも)の人であったことがわかる。⁽⁵³⁾父の俗姓は謝氏であり、母は柴氏という。幼くして餘干県南の雕峯山の法慈の席下に投じて剃髮し、⁽⁵⁴⁾仏門への道を歩んでおり、その受具は法臘から逆算すると、⁽⁵⁵⁾嘉定一三年の一九歳の時点であったことが知られる。

はじめに呉越(江蘇・浙江)の地に遊方し、心学を天童山の如浄に受けたとされるが、⁽⁵⁵⁾如浄と正詔との間の機縁の語句は伝えられない。この点、同時期に如浄に参じている道元禅師とも、天童山の同参として若干の面識があったとみた方が妥当であろう。正詔は道元禅師より二歳の年少であり、如浄示寂の宝慶三年当時すら二六歳にすぎない。^(二二七)いまだ若齢で力量を十分に發揮していなかったために、道元禅師の脳裏には印象的に写らなかつたのかも知れない。いずれにせよ、道元禅師とはまた違った意味での如浄晩年の愛弟子であったとい

えよう。⁽⁵⁶⁾

如浄の席下をを離れて後も諸老の門に歴参したらしく、それぞれにその所得を印可せられたという。その後、親が老いたために江南（郷里の江西）に還つたとされ、また列岫にて侍香となり、さらに撫州（江西省）臨川県の疎山白雲禪寺にて記室を掌っている。明確にはし得ないが、このとき疎山の住持であつたのが法兄の無沢徳霑であつた可能性が強い。その声名はしだいに高まり、ついに文昌の趙必愿（字は立夫）が江西の名峰、廬山にある天池禪寺への陞住を請い、これに応じて開堂出世しているが、その入寺時期は塔銘に「天池に宴坐すること十有八年」という表現がみられるから、示寂の年より逆算して淳祐三年頃（^(二四三)）に天池寺に入寺しているらしい。趙必愿は趙崇憲（字は履常）の子であり、常に祖父の趙汝愚（^(二九六)）（字は子直）の政を範としたらしい。しかも天池峰には趙汝愚の祠も存しており、正詔と必愿はきわめて深い道交が存したらしい。

ただし、天池寺は山も高く雲も深かつたために、正詔の会下の大衆は一〇〇人にも及ばなかつたようであり、小叢林ながら職分ははなはだ脩まっていたという。それはあたかも正詔が道元禪師のごとく、国王大臣に近づかず深山幽谷に居すべしとの如浄の訓戒を忠実に守つた人であつたことを伝えるものであろう。

南宋末曹洞禪僧列伝(上) (佐藤)

ところが、天池寺に居ること七年にして伽藍が燬失すると

いう大惨事に遭遇しているらしい。時期としては淳祐九年の頃（^(二四九)）のできごととみられる。正詔はその復旧に尽力しており、会下の僧衆が少ないながらも意気盛んな叢林の状況が知られる。道璨はその高唱古風な風貌を評して、塔銘にて「師、蕭閑凝遠にして、晋唐人の風味有り。歌詩に工にして、物に託して興を寄せ、其の胸中の至樂を陶与して、意は言外に在り。観る者、眼を具せざれば、乃ち諸家を以て之れを目標ん。是れ師を杜徳の機と見るなり」と称えており、正詔は山居を好み、山川風月を友とする人であつたらしく、その居住の庵を端明の厲文翁が明月庵と名付けたという。厲文翁（初名は髯翁、小山居士）は幼少より登朝して理宗に重んじられた人（^(二五三)）で、宝祐元年の進士であることから、正詔の最晩年に交流を持ったものとみられる。

正詔の示寂は景定元年四月であり、ときに世寿は五九歳、法臘は四〇齡であつたと伝えられる。門人たちは庵の後方に塔を建て、遺骨・舍利などを葬っている。得度の弟子が若干あつたらしいが、具体的には塔銘の依頼者である若鳳の名しか知られない。

なお『無文印』卷一九「書筭」には、

詔雪屋

未_レ去家時、已聞_二江東暮雲中有_一隱君子_二來_二江湖_一、又聞_二言行

於諸名勝間。竊伏惟念、郷之先達、有如此者。而乃不及一見、欠焉于胸中者、已二十年。然誦其詩、想見其人。大雪没屋忍凍行、吟於梅花樹下。清甚孤標、如晉唐間人品、固不待見而後知也。春風一緘、遠賜千里之外。不浚其所、未深、不導其所未歸、便欲推而納諸前輩長者之域。是豈愛人以德者、所當施於郷里後進之法耶。某学力落於漫浪、脚力困於脩途、眼力老於疾苦。十五年、心事已消殞無遺。嘉定諸老、凋零殆尽。荒荒天地、邈焉不知所向。一策東歸再拜、乞言於床下。行將見之。

という道璨が正詔に宛てた書簡が載せられている。道璨は生涯、正詔と相見する機会を得なかつたらしいが、道璨が書簡の上ながら、かなり正詔の人柄を慕っていたことが知られる。この書簡はおそらく如浄ら嘉定年間の諸禅徳の多くが亡くなつてより一五年の歳月が経過しているとする点から、す(二四一―二五二)でに淳祐年間の頃のことと見られる。

また正詔は詩僧としてもかなり卓越していたらしい。すなわち塔銘にて道璨は「東のかた海上に遊びて、嘗て師の兔園集を閲し、其の語を誦し其の人を想い見る」と述べており、正詔には「兔園集」なる詩文集が刊行されている。(60)しかも『無文印』卷八「序」および『柳塘外集』卷三「序」には、

韶雪屋詩集序

雪屋、入天童室、已參活句。晚入康山、宴坐絶頂。一迹不印人間地、乾坤清氣、尽入其手。無怪其詩之清而活。

也。余於雪屋未有一日雅、大雪没屋、行吟梅花樹下、甚想見其人。頃游吳越間、見所刊兔園集、字比此本差小。反復閲之、不無毫髮遺恨、欲告雪屋未能。今觀此編、前之遺恨者、毫髮不存。豈雪屋晚年所見、亦与余暗合耶。詩主於清而止於活、清之失也癯、活之失也放。此近日詩家大病無他、学不勝才、氣不勝識、理不勝辭、故未得其真、先得其似耳。学也氣也理也、難与今之習唐声者言也。雪屋大肆其力於是三者久。故清不癯、活不放、犁然有当於人心。嗚呼、微雪屋、吾將誰与論哉。

迹一足。其一乎。余於予与。有一即。字比此本差小一ナシ。余一予。耶一邪。主一至。辞一詞。習一有。犁一黎。

という実際に正詔の詩集に付した道璨の序文が見られることから、後に『兔園集』を再編した『韶雪屋詩集』も存していたことが知られる。正詔の人となりを知る上にも、また師の如浄のことや当時の曹洞禅者の足跡を知る上にも格好の資料であつたはずであろうが、残念ながら現存していない。また、その中で「天童の室に入りて、已に活句に参ず」とあり、正詔が天童山の如浄の下で、その示す活句に参じたとしている点は、如浄の禅を活句禅とする当時の評価として注目される。(61)

このように如浄門下は南宋末期の江南禅林において、それそれかなりの活動をなしていたことが知られるわけであり、

その宗勢は宏智派とともに当時の曹洞宗を二分する勢いが存したことが改めて窺われるのである。しかし、一時期ながらそれほど人材が揃った真歇派すなわち如浄門下もその後、南宋末から元初にかけて時流に乗ることができず、急激に衰微していったらしい。この点は後に松源派の竺(二二九)仙梵(二三四)偃が撰した「東明和尚塔銘」に、

唯、雲居之裔、繩繩而下、不絶如縷。至第八代、曰丹霞、乃有真歇・宏智。而真歇数伝而後、亦罕聞其人。

と記されるごとく、真歇派は数伝して後、またその系統の人の名を聞くことが稀となっていたようである。⁽⁶²⁾実際に禅宗史上、南宋末期の如浄の法嗣らの代で真歇派は中国禅林における活動を絶ち、元代においてはこの派の禅者で名の知られる人は地を払っていたのであり、わずかに宗珏や如浄の塔所である天童山の南谷庵などに細々とその関係者が居住している状態にすぎなかったのである。⁽⁶³⁾日本より入宋求法した道元禅師がこの系統の禅を如浄より嗣承したことは、まことに奇遇なできごとであったといえよう。

註

(1) この点に関しては、「南宋末期の曹洞宗の動向―天童如浄を中心に―」(『仏教史学研究』第三四巻第一号)においてその概略を記したので参照されたい。したがって、本稿はその

南宋末曹洞禅僧列伝(上)(佐藤)

各伝とも言つてよいものである。

(2) この中で塔銘の存する真歇派の慶元府雪竇足庵智鑑のほか、宏智派の泰州如臯広福微庵道勤・慶元府翠巖宗静・紹興府超化藻・常州宜興保安超・慶元府普照戒に関しては、すでに『嘉泰普燈録』巻一七に見録・機語未見としてその名が知られ、その活動期間は一二世紀末までに限られるものと見られることから、本稿ではいま取り上げないことにしたい。なお、宏智下の聞庵嗣宗(一〇八五―一一五三)の法嗣である道勤・宗静に関しては、拙稿「雪竇山の聞庵嗣宗について」(『曹洞宗研究紀要』第一五号)に簡略な考察が存する。

(3) 慧照慶預に関しては、石井修道「慧照慶預と真歇清了と宏智正覚と」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』第三〇号)を参照。また、『湖北金石志』巻一一所収の「随州大洪山第六代住持慧照禅师燈銘」に関しては、石井修道『宋代禅宗史の研究』「資料篇」(四九一―四九七頁)にその翻刻と書き下し・註が付されている。

(4) 慶預の嗣法門人としては、『嘉泰普燈録』巻一三には「見録」として「臨江軍慧力悟禅师」「福州雪峰慧深首座」の二人の名が、「機語未見」として「饒州薦福演禅师」「泗州普照充禅师」「随州智門雅禅师」の三人の名が見られる。ほかに「随州大洪山第六代住持慧照禅师塔銘」によって信州鵝湖子亨と随州大洪居寧の存在も知られる。このように慶預の門人は湖北(随州)を中心に江西(臨江軍・饒州・信州)や安徽(泗州)の諸地に活動したらしいが、福建(福州)に化を敷いた人としては惠深の名が知られるのみである。ちなみに

『五燈全書』の目録では、さらに慶預の法嗣として「大洪先禅師」「真覺能禅師」の名を挙げる。

(5) 『中国仏寺志』所収の光緒二年(一八七六)補刊本『鼓山志』巻四「沙門」では、

第三十六代孤峰禅師、諱惠深。閩泉赤嶼人、姓馮氏。年十四、依大乘仏心和尚剃落。参大洪預和尚得旨、紹熙癸丑、住持当山。(中略)嘉泰甲子五月、普説罷揮偈辞衆。以筆一拍而化。葬於三昧塔院。

とあり、元賢編集本よりかなり簡略化された内容となっていることがわかる。

(6) 「随州大洪山第六代住持慧照禅師塔銘」には慶預の雪峰山入寺について、

紹興癸丑秋、乃遂引去、下廬阜入七閩、閉関於雪峰之西室。閩帥大參張公守稔其名、以府城之乾元延致之。居亡幾、移住雪峰崇聖。雪峰古称海内甲刹。時真歇了公以広大縁法鼓之、適謝事。而師繼至独静、重自持其盛、不減前日。叢林尤以為難云。

とあり、紹興三年(一一三三)秋に随州より七閩(福州)に至り、雪峰山の西室に閉関し、その後、福州知事の張守(東山居士、一〇八四—一一四五)の招きで福州侯官県の越王山乾元禅寺に住しており、まもなく法弟の清了の後席を継いで雪峰山に遷住している。その接化は清了に勝るとも劣らなかつたとき、この二人により雪峰山は一時期、曹洞宗一色の感を呈していたものとみられる。ちなみに両者にはそれぞれ『雪峰真歇了禅師一掌録』と『雪峰慧照禅師語録』という語

録が存したときされるが、残念ながら伝存していない。惠深はときあたかも臨済宗の大慧宗杲(一〇八九—一一六三)が黙照邪禅の攻撃と看話禅の唱導を大きく展開していく中で、雪峰山の慶預に入門嗣法していることになるう。

(7) 『鴈山志』巻二「寺院(八十八刹建置沿革)」の「能仁寺」の項には、

在西内谷丹芳嶺下(即四十九盤嶺)、相伝、諾詎那為開山祖。按西域書、第五位尊者諾詎那大阿羅漢、統居震旦南大海際鴈蕩山。又云、龍湫雁蕩、乃吾仏弟子諾詎那尊者之化都也。詎那至山中觀瀑、遂坐化焉。宋太平興國元年丙子、僧全了入山結菴而居、名芙蓉菴(詳開山下)。至咸平二年、始建殿宇。四年、寺僧進百宝塔、賜名承天寺。政和七年、以禁中有承天寺、改能仁寺。紹興十二年、郡守閻丘昕、秦改能仁禅院、遂為鴈山大道場。復皇舅太寧郡王、請寺為奉先地、詔賜額曰時思薦福寺。至乾道七年、以太上皇后命、復為能仁寺。元至正丙午、遭丘燹。国朝洪武二十四年、立成叢林。至三十一年、僧曇竺、修建殿宇。後圯。万曆六年、督撫常熟徐公栻、重建。

とあり、寺の沿革が知られる。その禅刹開山は鼓山より至つた臨済宗楊岐派の竹庵士珪(一〇八三—一一四六)であり、その入山には真歇清了が深く関わっているらしく、清了の法嗣の寿崇も住持している。『扶桑五山記』一によれば、後には能仁普濟禅寺として甲刹の一に列している。

(8) 『福州府志』巻三一「職官四」の「福州知州事」によれば、辛棄疾、(紹熙)四年八月、以朝散大夫集英殿修撰知、兼

安撫使。有_レ伝。

とあり、惠深が辛棄疾（字は幼安、稼軒居士、一一四〇—一二〇七）の福州知事の時に鼓山に住していることが知られる。

(9) 『福州府志』卷三一「職官四」の「福州知州事」によれば、葉翥、（慶元）四年十二月、以_レ資政殿學士正奉大夫_二知張抑、六年四月、以_レ華文閣大學士_二知とあるから、このときの福州知事は葉翥（字は叔羽）であつたことが知られる。

(10) 『鼓山志』卷五「芸文志一」には、

列祖聯芳集後序 僧惠深〈本山住持〉

住山諸尊宿、俱有_レ塔銘、詳載_レ其始末。此所謂列祖聯芳集者、不_レ過_レ書_レ其所生之地・得法之由併出世歲月。茲山有_レ大興建、亦書_レ之。末後載_レ其示寂之日僧臘俗壽多寡所葬之方而已。自_レ円覚而下數伝、皆不_レ得_レ前人之式、每有_レ一事、則衍為_レ三三百言、或誇_レ他家勲烈之多、衲子輻輳之衆、火後舍利之繁、皆失_レ其実、使_レ觀者厭_レ見、得_レ非_レ反誣_レ前賢之德耶。今從_レ円覚伝、始刪_レ去繁詞、使_レ簡潔可_レ觀。於_レ山門_二少有_レ管作者、亦書_レ之、不_レ敢没_レ其功也。覽者幸察_レ焉。

紹興甲寅、住_レ当山_二孤峯惠深題。

という記事が見られる。これは惠深が『列祖聯芳集』なる書に付した後序であり、この書はもともと鼓山第一三代の慶麟（?—一〇六四）が著した開山円覚聖國師神晏（八六三—九三九）以来の歴代宗師の法要と行実をまとめたものであ

南宋末曹洞禪僧列伝(上) (佐藤)

る。あるいは慶麟の後の歴住伝に関しては、この惠深がまとめているのかも知れない。ただ、問題は「紹興甲寅」という年記が見られることであり、これでは紹興四年（一一三四）となつてしまい、惠深の住山期と符合しなくなる。おそらく原文にはもともと干支のみが記されていたものではなからうか。甲寅の干支で惠深の住山期と関わるのは、実にその六〇年後の紹興五年（一一九四）にほかならず、この説こそ妥当と見られる。

(11) 『中国仏寺志』所収の光緒二年（一八七六）補刊本『鼓山志』卷四「沙門」では、

第四十三代不羣禪師、諱清越。侯官陳古靈先生之裔。得_レ度於東禪融菴坦禪師。早歲遊方、歴_レ參名宿。淳祐庚戌、此山和尚遷_レ雲峰、次年府帥趙公、請主_レ本山。庚申三月示寂。闍維牙齒不_レ壞、塔_レ於黃坑積萃菴。

とあり、元賢編集本より内容もかなり簡略化されている。しかも、これによれば、惠深との関わりも不明となるほか、記事にも誤り（此山・雲峰）が見られる。

(12) 陳襄については『古靈集』二五卷その他の著者が存し、『古靈集』に附録される「著作佐郎知太常寺陳先生行狀」「陳先生墓誌銘」「古靈先生祠堂記」などが伝記資料として知られる。

(13) 融菴坦についてはその嗣証が定かでない。福州東禪寺は『福州府志』卷一六「寺院」の「閩県」には、東禪寺、在_レ易俗里。梁大同間建。「三山志」郡人鄭昭勇、捐_レ宅為_レ之在_レ白馬山上、旧名_レ浄土。唐武宗、廢為_レ白馬廟。

咸通十年、僧惠箴居之、及夜禅定有戎服、若拜而辞者。是夕或見白駒乘之。觀察使季景温、因撤祠為寺、号東禅浄土。錢氏号東禅応聖。大中祥符八年、賜号東禅寺。崇寧二年、因進藏經、加号崇寧万歳。紹興十年、改報恩広光。十七年、改広為光。有大藏、徽宗御書。〔閩都記〕明成化三年、重建改名東禅宝峰禅寺。寺中有放生池・芙蓉池・清陰亭・東野亭、郡守蔡襄書額。

とあり、また『扶桑五山記』一「大宋国諸寺位次」の「甲刹」によれば、

東禅。福州。開山「」覚城東際、白馬廟。

とあり、後に甲刹に列しているらしい。また、かつて東禅寺版の大藏經を開版していることで名高い。

- (14) 『福州府志』卷三一「職官四」の「福州知州事」によれば、趙必愿、淳祐五年、以華文閣直学士知、兼安撫使。有伝。

吳潜、淳祐七年、以端明殿学士再知、兼安撫使。

とあり、年時に問題があつて明確にはし得ないが、このときの府帥の趙公とは趙必愿のことを指すものと見られる。ちなみに趙必愿は後に示すごとく如浄門下の雪屋正詔と関わった人としても知られる。

- (15) 無行達真是楊岐派に属し、圓悟克勤―仏智端裕―水庵師―息庵達観―純庵善浄と次第する常州(江蘇省)無錫県の華蔵褒忠顕報禅寺の淳(純)庵善浄の法嗣であり、永覚元賢編『鼓山志』卷三「開士志」には、

第四十八代無行禅師、諱達真。連江人。姓鄭氏。早歳依法

林剃度。得法于常州華蔵淳菴禅師。初出世羅源大雲、次住大乘・慶城精嚴。丐閑雲居菴二十年。宝祐丙辰、趙平齋請主当山。明年七月謝事。癸亥正月十五日示寂。建塔本山歴代祖塔左。

とその足跡を伝えている。

- (16) 直菴元嗣は黄龍派に属し、黄龍慧南―晦堂祖心―靈源惟清―仏心本才―大心謨と次第する福州候官県右三房の横山仁王寺の大心謨の法嗣であり、永覚元賢編『鼓山志』卷三「開士志」には、

第三十五代直菴禅師、諱元嗣。郡城程氏子。年十四、出家仁王寺、嗣大心謨和尚。乾道辛卯、出世建寧靈石、遷大同。梁丞相、請住神光。甲辰、帥府趙侍郎、移主鼓山。朱晦翁先生、雅重之。淳熙己酉年十二月示寂。奉全身塔于積翠庵。

とあり、福州候官県右三房の烏石山神光寺その他を経て鼓山に遷住している。その示寂は淳熙一六年(一一八九)一二月であり、とくに朱熹(晩に晦翁と号す、一一三〇―一一二〇)がこの元嗣をかなり重んじ、両者が親しい道交をなしていたとされるのは注目すべき事跡であろう。清越の墓塔がこの元嗣の墓塔の建つ積翠庵に合祀される背景として、あるいは清越自身が若くして元嗣に学んでいる経験があるのかも知れない。

- (17) 真歇清了は真州(江蘇省)儀徴県の長蘆崇福禅院に開堂して後、明州(浙江省)慶元府昌国県の普陀山宝陀禅寺、福州候官県の雪峰山崇聖禅寺、慶元府鄞県の阿育王山広利禅寺、

建康府（江蘇省南京）上元県の蔣山太平興國禪寺、温州（浙江省）永嘉県の江心山龍翔禪寺、杭州（浙江省）臨安府余杭県の径山能仁禪寺、杭州府治内の皋亭山崇先顯孝禪寺という具合に遷住しているが、その活動地にそれぞれ法嗣が分布している。すなわち真州には長蘆妙覺慧悟と北山法通が、慶元府には天童山大休宗珪が、福州には龜山義初・寿山徳初・神光道新が、建康府には保寧興誉と移忠伝卿が、温州には能仁寿崇・龍翔道暉・幽岩了諒（子詠とも）が、杭州には崇先瀘堂徳朋（竹筒和尚、？一一六七）がそれぞれ育成されており、ほかには潭州（湖南省）の上藍祖卿の名が知られる。

ちなみに『重修楊州府志』巻二九「寺觀志二」の「儀徵県」には、

崇因永慶寺。北山上。宋靖康初、丞相吳敏、請為功德院。後徒於城内。元大徳中、復徒環故址、亦称北山寺。後有池深莫測、相伝為龍湫。西南有白蓮泡、花開時香遍、北郊人謂之香国、俱久淤廢。元余廷俊記略。崇因永慶寺、宋丞相吳敏元中、靖康間所創。真歇了弟子通師有高行、遂延為開山祖、寺以之重。後以辺兵俶擾、徒於州之翼城。大徳間、徒寺仍旧。（後略）

とあり、同様の記事は『儀徵県志』巻二〇にも見い出せる。これによれば、真州儀徵県の北山に存した崇因永慶寺は、靖康元年（一一二六）に宰相の吳敏（字は元中、中橋居士、一〇八九―一一三二）が功德寺としており、北山寺とも称され、清了の法嗣の法通が開山に迎えられていることが判明する。まもなく戦乱で県城内に移築されたが、元の大徳年間

南宋末曹洞禪僧列伝上（佐藤）

（一二九七―一三〇七）に元の地に戻されたといい、寺内には吳敏の墓も存したとされる。吳敏は清了の『長蘆了和尚劫外録』に序文を付した人であり、その弟の吳叙（字は元常）は出家して正光と名乗り、宏智正覚の法を嗣いで台州（浙江省）の天台山国清禪寺や衢州（浙江省）の烏巨山乾明禪寺などに住している。

（18）『攻媿集』巻一一〇に所収される大休宗珪の「天童大休禪師塔銘」と足庵智鑑の「雪竇足菴禪師塔銘」に関しては、石井修道『宋代禪宗史の研究』「資料篇」（五一六―五二一頁、五四四―五五四頁）を参照。

（19）東福円爾将来『宗派図』については、石井修道『中国の五山十刹制度の基礎的研究（1）』（『駒沢大学仏教学部論集』第一三号）に付録として翻刻される。

（20）拙稿「如浄禪師再考」（『宗学研究』第二七号）参照。

（21）他にも曹洞宗に対する意識として、たとえば『物初贖語』巻一七には、

跋宏智・張雪窓・自得・石窓墨跡

洞上一宗、至大陽明安而絶、柴石老人為求其人而統之。自投子而伝四世、得隰州古仏、丕承祖烈。赫然有光、猗歟休哉。蔡居士過我、出示所蔵一帖、四法師三印頌、真宗髓也。必畫爛然、瘦勁鋸快。雪窓其宿冤、自得・石窓其破家子、語附其後、正一屋裏人也。於戲新豊古曲、果聞寥於今乎。今誰柴石哉、柴石將何求哉。

とあり、浮山法遠（柴石老人）の代付を高く評価し、また宏智正覚（隰州古仏）・張良臣（字は雪窓）・自得慧暉・石窓

法恭らが活躍した当時の隆盛ぶりと大観当時の衰退したありようを対比し、新たに曹洞宗を担う優れた人物の出現を期待している。

- (22) 『扶桑五山記』一「天童住持位次」には、「十六宏智覚禅師、十七為禅師、十八大休珏禅師、(中略) 廿一浄禅師」とあり、これによれば如浄は第三二世となる。ただし、道元禅師は『正法眼蔵』「梅華」にて「先師天童古仏者、大宋慶元府大白名山天童景德寺第三十代堂上大和尚也」と述べており、如浄を天童山第三〇世とする。

- (23) 智鑑の示寂は紹熙三年(一一九二)八月一六日であり、近年の宝慶三年(一二二七)如浄示説の考証によれば、このとき如浄は三一歳に当たっている。おそらく棘林杷はいまだ二〇歳代の若齡であつたものと見られる。

- (24) 「雪竇足菴禅塔銘」には、
 師生于淮南、而化縁独在四明。屢易法席、名震江湖、而終不越境、自号足菴。
 とあり、智鑑がほぼ四明の地に化導を敷き、ために自ら足菴と号したことを伝える。如浄も定海県東南の瑞巖開善禅寺や鄞県東の天童山景德禅寺に住しており、棘林杷を含めて智鑑の門人の多くが四明の地に留まつたものと推測される。

- (25) 『虚堂和尚語録』卷末「行状」によれば、
 由是回浙、到浄慈、見浄和尚。浄問云、爾還知所生父母通身紅爛在荆棘林中麼。師云、好事不在匆忙。浄隨後打一拳。師展两手云、且緩緩。

とあり、智愚が浄慈寺再住時代の如浄に参じていることが知

られている。この点はすでに拙稿「虚堂智愚の参学期の動静について(上)(下)」(『曹洞宗研究紀要』第一九・二〇号)にて考察しており、参照されたい。ちなみに棘林杷の道号である「棘林」というのも、この古則(葉山通身紅爛)に因むものと見られる。

- (26) 『宝慶四明志』卷一九「定海県志第二」「寺院」の「禅院」には、

崇梵院、県東南七十里。唐天復元年置、名啓霞。皇朝宝元元年、改今額。常住田三百二十六畝、山四千八百七十畝。

とあり、また『延祐四明志』卷一八「釈道攷下」の「定海県寺院」には、

仏巖禅寺、県南七十里。唐天復初、明禅師置。宋宝元初、請額名崇梵。後改今額。

と記されている。これによれば啓霞山に存した崇梵院は、その後、元代には仏巖寺と改称されていることが知られる。

- (27) この点は拙稿「虚堂智愚の頌古・代別編纂をめぐって」(『印度学仏教学研究』第二八卷第二号)に詳しい。

- (28) 『虚堂和尚語録』卷三「慶元府阿育王山広利禅寺語録」には「師宝祐四年四月初七日、在霊隠鷲峯庵受請、十九日入寺」とあるのに対して、語録卷末の「行状」では「宝祐戊午(六年)、育王虚席。禅衲毅然陳乞。有司節齋尚書陳公、嘉其公議、得与敷奏。是年四月、領寺事」となっており、年時に相違が見られる。ここでは語録にいう宝祐四年四月をもつて定説としておきたい。

- (29) 『虚堂和尚語録』卷一「慶元府万松山延福禅寺語録」はその

上堂語録の編成よりして淳祐四年（一二四四）春より始まっているものと見られ、「師在啓霞受請辭衆上堂」にて「雖作三万松孤頂雲、終憶霞峯老人石。（中略）山僧自退芝峯、託跡于茲、三歴寒暑」と述べていることから、芝峰（瑞巖開善禪寺）を退いてから三ヶ年を啓霞山にて過ごしたことが知られ、また、その間、霞峰老人すなわち棘林杞と深い道交が存したことを偲んでいるのは注目される。

(30) 仗錫山延勝禪院については、後に宏智派の自得慧暉の法嗣である仗錫崇堅を問題とする箇所です。詳しく触れたい。

(31) 『虚堂和尚語録』卷三「慶元府阿育王山弘利禪寺語録」によれば、「仗錫和尚至上堂」の直前に「行礼到大慈請上堂」が存し、「復拳、堂頭物初和尚拳、（中略）殊不知、今日被慈峯老子拈定咽喉、直得無取氣処」と述べていることから、棘林杞が阿育王山に至る直前に、智愚が鄞県東六〇里の大慈山教忠報国禪寺に物初大観を訪うていることが知られる。とすれば、智愚・大観・棘林杞の三者は当時、かなり親密な道交をなしていたと見るのが可能であろう。

(32) 拙稿「無外義遠の活動とその禅風」（『曹洞宗研究紀要』第一七号）参照。

(33) 中国燈史に記される如浄門下の孤蟾如瑩と石林秀に関して、『増集続伝燈録』と『祖燈大統』は如瑩を先に挙げ、『禅燈世譜』『繼燈録』『五燈全書』は石林秀を先に挙げる。なお、これらの燈史の中で鹿門覚と雪庵從瑾の二人を如浄下に記載するものが見られるが、この二者は明らかに如浄の法嗣ではないことから、ここでは問題としない。また、日本撰述

史料としては、道元禅師に仮託される「如浄禅師統語録跋」では、法嗣出世者六人として「承天孤蟾如瑩・瑞巖無外義遠・華巖田翁頃公・自菴師楷・嶽林癡翁師瑩」の名を挙げており、『仏祖宗派図』（『仏祖宗派綱要』とも）では、「日本永平道元・岳林癡翁師瑩・承天孤蟾如瑩・承天短蓬遠・瑞巖無外義遠・靈岩以道尊・華巖田翁頃」の名を挙げ、『正誤仏祖正伝宗派図』（『正誤仏祖宗派之図』とも）では、「承天孤蟾如瑩・瑞巖無外義遠・華巖田翁頃・石林秀・嶽林癡翁師瑩・靈岩以道尊・自菴師楷・日本永平開山道元・日本日向大慈山鉄山」となっている。これらに関する考察は、すでに拙稿「如浄会下の人々―嗣法・参学門人の追補―」にてなしていただいたので参照されたい。

(34) 『蘇州府志』卷三九「寺觀一」の「呉県」には、承天能仁禅寺、在阜橋東。姑蘇志、在甘節坊。相伝、梁衛尉卿陸僧瓚故宅。因觀祥雲重重所覆、請捨宅為重雲寺。臺省誤書為重玄、遂名之。唐為広徳重玄寺。錢氏時、又加繕葺、殿閣崇麗、前列怪石。宋初、改承天。宣和中、禁寺觀橋梁名、不得用天聖皇王等字、又改能仁。元並存旧額、称承天能仁。以寺前有土阜、亦名双我寺。寺有無量寿仏銅像高丈余盤溝大聖祠。万仏閣・経楼・鐘楼。至順間、悉燬於火。至元間、復新之。至正末、張士誠挾為宮。明初復為寺、僧綱司在焉。（後略）

とあり、蘇州府城に存した承天能仁禅寺が如何に政治的な事情の上に変遷をなしてきたかを知ることができる。『扶桑五山記』一「大宋国諸寺位次」の「甲刹」には、

承天。蘇州(平江長州県)能仁寺。開山伝宗禅師。双峨峯・碧玉盤・万仏閣。

とあるから、後に甲刹の一つに列していたことが知られ、禅刹開山は雲門宗の雪竇重頤の法嗣伝宗とされる。曹洞宗では如瑩のほか、宏智派の短蓬遠も住している。

(35) 蒙山徳異は、『六祖壇経』一卷を校訂し、元の至元二十七年(一二九〇)に序文を付しており、これは後に高麗国にて刊行されて世に徳異本『六祖壇経』として名高い。

(36) 『如浄和尚語録』の「明州天童景德禅寺語録」には、
上堂。心念粉飛、如何借_レ手。趙州狗子仏性無。只箇無字鉄掃帚、掃処紛飛多、紛飛多処掃。転掃転多、掃不_レ得処拚_レ命掃。昼夜豎_三起脊梁、勇猛切莫_三放倒。忽然掃_三破太虚空、万別千差尽豁通。

という上堂語が見られ、やはり「趙州無学」を学人に参究させている。

(37) この時期に永平門下の寒巖義尹(一二一七—一三〇〇)が入宋し、如浄の高弟である無外義遠に『永平元禅師語録』の校訂と序跋を請うており、ついで靈隠寺の徳寧に参じて跋文を得、さらに径山に遷る直前の智愚を浄慈寺に訪うてやはり跋文を得ている。石帆惟衍を含めてこれらの禅者が如浄門下とときわめて深い関わりの中にあつたことが証明されよう。この点は拙稿「義介・義尹と入宋問題」(『宗学研究』第三二号)を参照。

(38) 『扶桑五山記』一「浄慈住持位次」には「四十三虚堂愚禅师、四十四簡翁敬禅师、四十五淮海肇禅师、四十六虚堂惠禅

師(再住)、四十七石帆衍禅师」とあり、智愚が再住のごとく扱われているのに問題も残るが、『続群書類従』第九輯上(巻二二八)に所収される宏智派の雲外雲岫が撰した「大日本国東海道相州路鎌倉県巨福山建長興国禅寺第十代勅諭大通禅師行実」によれば、

度宗咸淳改元乙丑也、是年秋八月、石帆衍和尚赴_レ詔、自_レ呉之承天、移_三浄慈。師径往入室参問、資縁契会、頓止_三奔馳、侍_三香山中。六年庚午春二月、石帆有_レ旨領_三天竜、師随侍行也。

と記されている。智愚が径山に遷るのに際して、惟衍がその後席を継いで承天寺より浄慈寺に赴いていることが知られる。ちなみに惟衍がその後、咸淳六年(一二七〇)二月に住しているのは天竜寺ではなく天童山の誤りである。

(39) 拙稿「如浄会下の人々—嗣法・参学問人の追補—」(『宗学研究』第二八号)および前出「虚堂智愚の参学期の動静について(上)(下)」を参照。

(40) 『正誤仏祖正伝宗派図』は明らかに中国燈史(『増集続伝燈録』など)を考慮して、石林秀の名を挿入している。

(41) 『蘇州府志』巻四二「寺觀四」の「元和県」には、
雲巖禅寺、在_三廓外虎邱。晋司徒王珣及其弟珉之別業、咸和二年捨建。隋仁寿中、建_三塔七。成_三於殿後。初_三於劍池、分_三爲_三東西二寺、後合_三爲_一。宋至道中、重建。郡守魏庠、奏賜_三今額。景祐中、建_三御書閣。紹興中、建_三藏殿。尋皆燬_三於兵。元至正四年、重建、黄潛記。明洪武中火。永樂初、住持法宝重修。(後略)

とあり、『扶桑五山記』一「大宋国諸寺位次」の「十刹」には、

虎丘。蘇州平江府雲岩禪寺。開山明教大師。劍池・海涌峯・生公臺・看經室・千人岩・試劍石・點頭石・致爽閣（方丈）。とあり、禪宗十刹の第九位に列している。禪刹開山は北宋代の雲門宗の明教大師仏日契嵩（一〇〇七—一〇七二）とされる。

(42) 智愚は阿育王山住持時に時の丞相吳潛（号は覆斎、一一九六—一二二六）との不和により宝祐六年（一二五八）六月に難を蒙って獄に繋がれているが、許されて後、東山なる地に閑居している。この東山は虎丘山の別称であろうと推測されるが、あるいは慶元府鄞県東南四〇里の東山慧福禪寺その他を指す可能性も存する。

(43) 『物初贖語』卷二一の「祭」はほぼ年代順に配列されているものと見られ、損翁の示寂は棘林杷と同じ頃と推測される。

(44) 金山龍游禪寺に関しては、『中国仏寺志』に、『行海金山志略』四卷、『金山志』一〇卷、『続金山志』二卷など清代編纂の寺志が存している。『扶桑五山記』一「大宋国諸寺位次」の「甲刹」には、

金山。潤州鎮江府龍遊禪寺。在揚子江中。宋真宗皇帝、夢遊此寺、改名龍遊寺。開山裴頭陀。化城・金鰲閣・玉鑑亭・大徹堂・天然函画・妙高臺。一軒有天然函閣・妙高臺兩額。吞海亭・中濡泉・中冷泉・龍井・郭璞墓。三小島之一也。五聖閣・千仏閣・煙雨奇觀・雄跨堂・頭陀石。

とあり、同じ鎮江の焦山普濟禪寺とともに禪宗甲刹の一に例

南宋末曹洞禪僧列伝(佐藤)

している。なお宋代の曹洞禪者としては、芙蓉道楷の法嗣である枯木法成（一一七一—一二二八）が北宋末期に、また法成の高弟である金山堅が南宋初期に住していることが知られるにすぎず、南宋末期の損翁については燈史にはその名が見い出せない。

(45) 癡絶道冲が蔣山の住持であったのは、『癡絶和尚語録』卷末付の趙若琚の状した「径山癡絶禪師行状」や『無文印』卷四「行状」の道璨が撰した「径山癡絶禪師行状」によれば、宝慶元年（一二二五）より嘉熙二年（一二三八）までのことである。

(46) 『宝慶四明志』卷二一「象山県志全」「寺院」の「禪院」には、
智門院、県西二十五里。旧名保安院。周顕徳四年置。皇朝治平二年、改賜今額。常住田六百六十四畝、山二千二百四十四畝。

とあり、また『延祐四明志』卷一八「釈道攷下」の「象山県寺院」に、
智門禪寺、県西二十五里。旧名保安。周顕徳中置。宋治平初、改今額。崇寧二年八月七日、象山県令金陵徐敏求、為之記曰、（後略）

と記されており、象山県ではかなりの名刹であったらしい。ただ、その寺格は先の金山に比すればかなり下位であり、おそらくは損翁が晩年に退閑していたものと見られる。

(47) ちなみに『月和尚語録』卷下「仏祖讚」には、
天童浄和尚

両頭白牯眉毛豎、三面狸奴鼻孔凹。一隻皮靴能剔脱、月明金鳳宿龍巢。

という松源派の月江正印(一二六七?)が讚した如浄に対する祖贊が存するが、これは明らかに先の捐翁(損翁)の礼祖塔の偈頌を受けるものであろう。

(48) 『如浄和尚語録』「讚仏祖」には「侍者徳霑編」とある。

(49) 『無文印』二〇巻は咸淳九年(一二七三)の序刊であり、巻首の李之極の序によれば、門人の惟康による編纂とされる。その編成は巻一・巻二に「詩」、巻三に「記」、巻四に「行状」、巻五に「塔銘」、巻六に「銘」、巻七に「道号」「序」、巻八に「序」、巻九に「序」「字説」、巻一〇に「題跋」、巻一一に「四六文」、巻一二・巻一三に「祭文」、巻一四に「雜著」、巻一五より巻二〇に「書笥」がそれぞれ収録される。これに対して、『柳塘外集』四巻は『四庫全書珍本五集』に収録されて現今に知られ、巻一に「五言古」「七言古」「五言律」「七言律詩」「七言絶句」、巻二に「銘」「記」、巻三に「序」「文」「疏」「書」、巻四に「塔銘」「墓誌」「壙誌」「祭文」がそれぞれ収められているが、序文や跋文などはまったく載せられていない。おそらく『柳塘外集』は『無文印』の抜粋本か草稿本であり、日本禅林へは伝えられずに緞わったものであろう。

(50) 道光六年更正重訂本『金谿県志』巻三「寺觀」には、疎山寺。唐何仙舟隱此。中和間、始創白雲寺、大順初、刺史危全諷、延匡仁日照大師為住持。南唐、改名疎山。宋太宗・真宗・仁宗・高宗、皆賜御書寺額。元至元間、僧嗣

寧重修。明洪武十三年、因事籍没田産。後准僧録司、請復、付僧湛然為監院、婦併靈巖等四処、為叢林。明尚書呉文莊、悌施香火田、後人因立崇儒祠、祀文莊。

とあり、白雲寺の開創は中和年間(八八一―八八四)であるが、大順年間(八九〇―八九一)に撫州刺史の危全諷が洞山下の日照大師匡仁を招いて住持としており、南唐に疎山と改名されている。そして、宋代を通じて寺門はかなり栄えたことが知られる。ちなみに『扶桑五山記』一「大宋国諸寺位次」の「甲刹」には、

疎山。杭州白雲禅寺。開山匡仁禅師。十八灘。

とあり、疎山を杭州とする誤記も見られるものの、南末末元代には甲刹に列しており、徳霑の住持していた当時も、かなりの大刹であったことが察せられる。

(51) この点はずぎの雪屋正詔の項目を参照して頂きたい。

(52) 大觀の当時は、すでに北地では金末元初の動乱期に相当しており、曹洞宗では鹿門自覺の系統に属する万松行秀(一一六六―一二四六)やその法嗣の雪庭福裕(一二〇三―一二七五)・林泉從倫らが活躍している時期である。

(53) 正詔の道号である雪屋とは、この人が晩年に廬山(康山)に入り、その絶頂に宴坐した際、大雪がその屋を没することくであったことに因むらしい。また正詔は雪裏に華開く梅花を好んだらしく、如浄や道元禅師とも共通する一面が見られる。

(54) 雕峰を『柳塘外集』では雄峰とする。

(55) 道璨は「天池雪屋詔禅師塔銘」の中で「嘉定間、浄禅師

倡_二足庵之道于天童_一」と述べており、如浄が嘉定年間にすでに天童山に住していたことを伝える。この点は古写本『建撕記』が如浄の天童山入院を寧宗の請状によるとする点と一致しており、如浄は嘉定一七年（一二二四）秋には天童山に赴いているものと見られる。したがって、正詔の来参もこの年ということになる。

(56) 注目すべきは道璨が銘文において「天童の長翁」と如浄を呼称していることであり、すでにこの頃より長翁を如浄の道号のごとく使用する風が存したらしい。

(57) 正詔が侍香を典ったときれる列岫については、いまだ所在地を明確にし得ない。

(58) 趙必愿はすでに見たごとく慧照派の不群清越を鼓山の住持に拝請した人でもある。また廬山の大林峰の一阜、天池峰に存する天池寺に関しては、『廬山志』卷三「天池寺」の項に、天池山上有_二天池寺_一。（中略）宋嘉定間建_レ寺。元壬辰兵燬。明洪武六年復建。（中略）按_二天池寺志_一、旧名_二峯頂寺_一。晋慧持、建_二寺池上_一、始名_二天池_一。宋曰_二天池院_一。明太祖勅_二建天池護国寺_一。以_レ寓_二祀四仙_一、成祖重勅曰_二天池万寿寺_一。宣宗再勅曰_二天池妙吉禅寺_一。故曰_二三勅天池寺_一。（後略）

とあり、その沿革を知ることができる。晋代の慧持の創建になり、峯頂寺と称したが、寺が池の上に建てられたことから、天池の名が一般化したらしい。おそらく禅刹に改められたのが嘉定年間（一二〇八—一二二四）と見られ、その直後に正詔が入院していることが判明する。また同じ箇所には「趙忠定公汝愚祠」として、

南宋末曹洞禅僧列伝(上) (佐藤)

祠在_二山椒_一。以_レ祀_二忠定与其父母_一、莫_レ知_レ所_二由始_一。今廢。嘉定四年趙崇慧、七年徐邦憲、有_レ祭_二趙汝愚_一。文_レ《桑紀》。丞相趙汝愚墓、在_二餘干縣南雕峯山_一。子崇慧墓亦在_レ焉。《光緒江西通志》

という記事が見られるから、天池峰の山椒には趙汝愚とその父母を祀る祠が存したことが知られ、また趙汝愚とその子の趙崇慧の墓は餘干縣南の雕峯山に存したときれる。雕峯山はいうまでもなく正詔の出家の地であり、汝愚の孫に当たる趙必愿は早くから正詔と深い関わりが存したものと見られる。

(59) 厲文翁も晩年の正詔と道交を結んだ人であろう。

(60) 『兔園集』とは、あるいは自らの著作を謙遜した言い方で兔園冊に通じ、卑近な書物といった意味であろうか。あるいは獅子が兔を捕えるにもその全力を尽くすことに準えたものか、または山川風月を友とした正詔が月の異称として兔園の語を使用したとも解されよう。

(61) とりわけ、「天池雪屋詔禅師塔銘」の中で、正詔が如浄の活句禅を肯わず、従来の曹洞宗旨に軌道修正を計っている点は注目されよう。

(62) 東明慧日には『東明和尚語録』三卷（『五山文学新集』別卷二に所収）が存し、これに付録される「東明和尚塔銘」は松源派金剛幢下の竺仙梵僊（一二九二—一三四八）の撰述であり、梵僊の詩文集である『天柱集』卷末（『五山文学全集』卷一）にも収められている。

(63) 南谷庵のことに關しては、拙稿「曹洞禅者の日中往来について」（『宗学研究』第二六号）を参照。